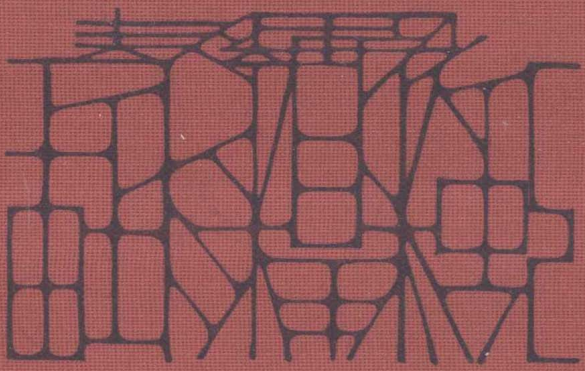

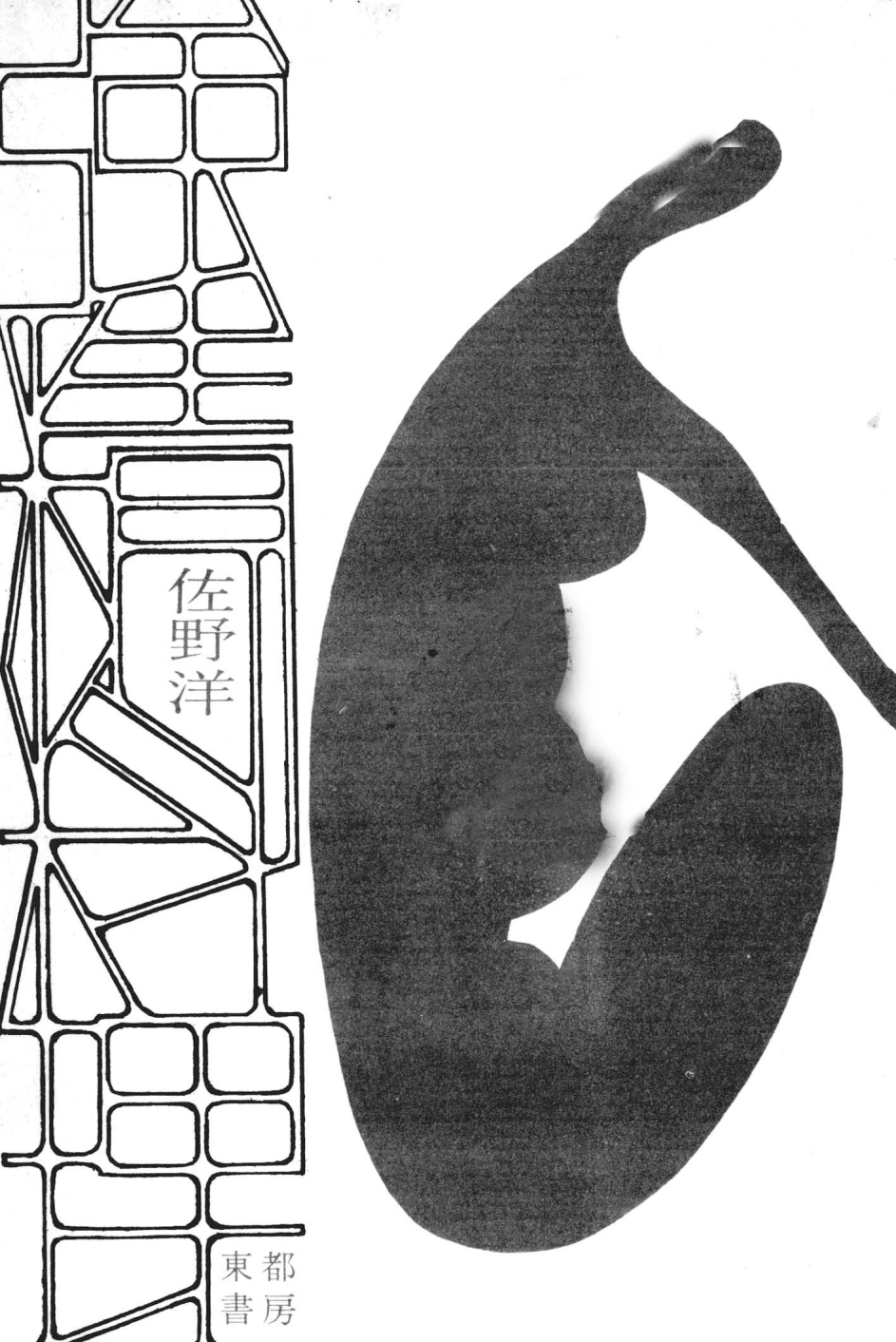

佐野洋

都房
東書

強精料理　　定価320円

昭和38年8月20日　第1刷発行
著者　佐野　洋
© You Sano　1963
発行者　西村俊成
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社加藤製本
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話(941)3111　振替(東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします

目次

贈られた女　5

陽の当る椅子　45

駐車禁止　93

匂いの状況　125

穴　165

装幀　中島靖侃

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

贈られた女

1

彼は、そのとき以来、『進退伺い』という四つの文字から、意識を遠ざけることができなかった。

なだめられ、無理に乗せられたシボレーの座席の上でも、やがて着いたこの家の一室でも、そのことを考え続けた。

頬被りしてしまえば、わからないことなのかもしれない。しかし、最後まで、それを隠せるとも思っていなかった。いずれは、だれかの口から、秘密が洩れ、彼は責められるだろう。そうなってからではおそすぎる。いかなる抗弁も聞いて貰えないで、彼は破廉恥漢というレッテルを貼られ、追放される。長い間、彼の汚名は、語り草にされるだろう。彼が追放され、彼の顔がどんなであったかを、人々が忘れてしまうころになっても、その汚名は消えないのではあるまいか？

それよりも、むしろ、先手を打って、彼の方から、『進退伺い』を出した方が賢明であろう。

『市政記者会・クラブ員以外の入室厳禁』ドアには、あまりうまくない字で、こう書かれた紙が貼ってある。貼られて、かなりな日数が経っているためであろう、紙は焼けて黄色になっていた。

梅本はズボンのポケットに手を突込んだまま、からだでドアを押し、部屋の中にはいった。

「やあ、おとといはどうも……」

他社の記者たちが、乱暴な口調で挨拶をした。前々日の土曜、この記者会全員が、市長に招待されたのである。『おとといはどうも』とは、そのことであった。

梅本は、クラブの真中にコの字型に置かれた長椅子に腰をおろした。『サッちゃん』と呼ばれるクラブ付の少女が、茶を入れて持って来た。彼女は、昼間は記者クラブに勤め、夜間高校に通っている。ときに、クラブ内で猥談が行なわれたりすると、黙って立ち上り、部屋の外へ消えて行く。このクラブに勤めて三年になるというが、すれたところはなかった。

「サッちゃん、ぼくの恋人来ていないか？」

梅本は、茶碗を受けとりながら言った。

「恋人？　あ、貝塚さんね。きょうは、まだ見えていません」

「へえ。珍しいな」

たしかに、それは珍しいことであった。東京で発行されている『東都新報』の記者、貝塚は、

二ヵ月前、東北の支局から、この市へ転任になって来た。記者になって、三年目だというが、仕事が楽しくてたまらないというタイプであった。毎朝、最も早く記者クラブに現われ、庁内の重要部署を一まわりして、クラブで休んでいると、他社の記者が出勤するという具合だった。

梅本は、この貝塚と、毎朝碁を打つことを日課にしていた。相手は、その前に、一応の取材をして来ているのに対し、梅本は出勤すると同時に碁盤に向うのである。しかし、その日課がすまないうちは、庁内を歩き回る気がしなかった。

それは、一つには梅本の社には、ほかにも市役所詰の記者が三人いるという安心感があったせいでもある。

このR市で発行されている所謂地元新聞は、梅本の勤めている『常栄新聞』だけであった。従って、市内版と称する、R市民だけを対象にした紙面を持っているのも、常栄新聞一紙である。その市内版を埋めるために、市役所を専門に担当している記者が、四人いるのである。他社の場合は、市役所と他の部署とを掛け持ちしている者が多かった。

「へえ、貝塚君まだ来ていないの？　おれは、もうとっくのとうにやって来て、中を回っているのだと思った」

中央日報の吉沢も、改めて驚いた声を上げた。

「いや、奴さんのことだ。社に行って特ダネでも書いているのじゃないか？」

こんなことを言うものもいた。貝塚が働き者であり、また敏腕であることは、クラブ員全員が認めていた。

「でも……」
と、サッちゃんが言った。
「さっきから、社電が来ているんです」
社電とは、社からの電話という意味である。そう言われてみると、連絡用の黒板に、『貝塚さん社電、九・三〇』と書かれてあった。
「二日酔じゃないかな。あの晩、彼酔いつぶれていたから……」
吉沢が思い出したように言った。
「二日酔と言っても、きのう一日、日曜がある。まさか、三日酔するほど、飲みはしなかったろう」
「うん。しかし、あの日、彼は結局どうなったんだ。座敷にごろ寝していたじゃないか……」
梅本は言いながら不安になって来た。何が原因で、その不安がやって来たかわからなかったが、貝塚の身に異変があったのではないかという疑いがあった。
梅本は、飲みかけの茶を、テーブルの上に置くと立上って、記者室を出て行った。
記者室は二階の北端にあった。そして、同じ階の南端が市長室である。その隣に第一助役室、第二助役室が並び、手前に秘書課があった。秘書課の前あたりから、市長室までの間は、廊下にじゅうたんが敷いてあった。
梅本は秘書課のドアを開けると、まっすぐ、課長のデスクへ歩いて行った。
「や、おとといは、どうもご苦労さまでした」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

課長の時村が親しげに話しかけた。
「どうも、こちらこそ……」
「あれから、皆さん、どこへ回ったんです？　お伴したかったんだけれど、邪魔するのも悪いと思って」
「そうさ、課長のような紳士が来たら、邪魔でしようがなかった。第一、その蝶ネクタイがあっては、悪いこともできないだろうけれど……」
時村は、冬でも夏でも、きちんと蝶ネクタイを締めていた。『マネージャー』というあだ名を、記者たちが奉っているのは、一つにはその蝶ネクタイのためであった。さらに、市長の行動の一切を、マネージしているという意味も、そのあだ名には含まれているかもしれない。
「ところで課長、東都の貝塚君は、あれからどうなったの？　ぼくらが帰るときは、ぐうぐう高いびきで寝ていたけれど……」
「いや梅本さん」
時村は声を潜めた。
「そんなことを聞くのは、よしなさいよ。武士の情けだ」
「え？　どういうことです？」
「そう白ばっくれなくても、察しはつくでしょうよ。彼、まだチョンガーなんでしょ？　それなら、恋愛をしたところで……」
「ふうん？　妙だな」

梅本は首をひねった。時村が暗示したことはわかったが、それは却って不思議だった。そういうことがあり得たとは、新聞記者の常識として、考えられなかった。

2

『進退伺い』

『私こと、酒色の誘惑に負け、ために著しく、社員としての品位を傷つけ、また会社の名誉を損いました。……』

頭の中で、こんな文章を作ってみたが、どうも気にいらなかった。あまりにも漠然とし過ぎている。

彼が日ごろ書いている文章と、かけ離れているから、ことさらに、そう思うのであろうか？では、具体的に書けば、どのようになるか？

『私こと、×月×日、市内門前町料亭〝小いく〟に於て開かれた市長招待の宴会に於て、芸妓の勧めるままに、日頃の酒量を越し、……遂に意識不明になり……このため……』

こう考えて、彼は苦笑した。これほど正直に書く必要もあるまい。『芸妓の勧めるままに』は、余計かもしれない。……

しかし、それは事実なのであった。もし、その女が、巧みに持ちかけ、始終彼の盃に注意しているというようなことがなかったら、あれほど急ピッチに、盃を干さなかったであろう。

それにしても、なぜ、あの女は自分のところばかりに、徳利を持って来たのか？

市長が市政記者会を招待する宴会は、春秋一回ずつあるのが慣例であった。しかし、前々日の土曜日に行なわれた宴会は、こうした慣例に従ったそれではなかった。

『市立養老院地鎮記念』という名目をつけて、市長から申出たものであった。

この招待を受けるかどうかにつき、クラブでは臨時総会を開いた。

春秋二回の定期的な招待なら問題はないが、慣例を無視した臨時の招待には、何か底意があるのではないかという疑問を持ったクラブ員も少なくなかったからだ。

「いや、そんなことはないさ。市長はこの間から、ぼくらと話し合いたがっていたんだ。それで、適当な名目をつけ、招んだだけだろう」

結局は、梅本と同じ社のキャップ、木村がこう言って、招待を受けることになったのだった。

木村がこのような弁護論をしたのには、理由があった。言わば、陽動作戦なのである。

――現在、常栄新聞では、養老院の建築に絡む、汚職を探っている最中であった。用地の買収、さらに請負業者の指定などに、市議や顔役が暗躍した形跡があった。その市会議員は、市長の実弟である。場合によっては、市長をも追及するという方針で、地固めの取材をしていた。

市長の招待は、だから、その動きを事前に知り、お手柔らかにという挨拶なのかもしれなかった。

しかし、そういう疑いを持ちながらも、常栄新聞としては、招待を受けざるを得なかった。なぜなら、もし招待を断れば、相手は常栄新聞が汚職に気づいていると考えて、いろいろの手を打つであろう。そうなっては、ますます取材が困難になる。

それに、他社はまだこの汚職を取材している様子はなかった。そこで、現在、市長の招待を断るように、木村や梅本が主張すれば、何かを掴んでいるからではないかと、他社の連中も、裏を想像するであろう。

ところが、その反対を主張して、招待を受けることにすれば、市長側も警戒心を解くであろうし、他社の記者たちも、よけいなカンぐりはしないはずであった。

木村はクラブ員中の最年長だったから、こういう場合、彼の意見が、たいてい通った。

宴会は、市内で最上級と目されている料亭『小いく』で行なわれた。市長の席というので、芸者も粒よりの妓が選ばれていた。市長側からは、市長、二人の助役、部長全員と秘書課長が出席したのである。

その宴会では、貝塚は梅本の隣に座っていた。酒が好きな貝塚は、最後から最後まで、盃を持ち続けていた。食膳のものには、全然手をつけず、酒だけを流しこんでいたが、終り近くなってから、

「ちょっと失礼。明日が日曜だと思ったら、急に睡くなった」

と言って、横になってしまったのである。

そんな貝塚を見て、市の部長連中は、却って喜んだ。

「やっぱり、日ごろ一番働いている人は、疲れが真先に出るんですな」
総務部長が、こんなじょうだんを言った。貝塚の仕事熱心は、部長たちも認めているようであった。
やがて、会が終り、帰ろうとするとき、梅本は貝塚を起そうとした。
「いいじゃないの。せっかくこうやって気持好さそうに寝ているんだもの。今起したらかわいそうだわ」
芸者の一人が、梅本の手を抑えた。彼女は宴会の最中も、始終、貝塚の前に座り、楽しそうに話をしていた。
「しかし、こうやって、敵中に置いて帰るのも心配だからな。君たちに取って食われると困る」
「敵中だなんて、憎らしい」
彼女は梅本の脇腹をつねった。彼女も酔っているらしく、眼が真赤であった。
「あ、梅本さん」
秘書課長がそばにやって来て言った。
「もうしばらく、寝かしておやりなさいよ。わたしが責任持ちますから。奥さんのある方なら、早くお帰ししなければ悪いが、貝塚さんなら、少し帰りがおそくなっても、怒る人はいないでしょう」
「そうよ。この人は捕虜になったの」
先刻の芸者は、まだ、そんなことを言っていた——。

貝塚は、あのあと、どうしたのであろうか？　梅本はその点を憂えた。『責任を持つ』と言った秘書課長は、貝塚が結局は泊ってしまったというような言い方をしている。

ただ泊っただけなら、とりたてて問題になることもあるまいが、芸者を当てがわれたのだとすると、それは、ちょっとしたスキャンダルである。東都新報の支局長や、地方部長に知れれば、懲戒は必至だと思われた。

梅本が大学を卒業して、常栄新聞にはいったとき、見習記者講座というのが、社内で開かれた。編集局の各部長、論説委員などが、新聞の使命とか記者心得のようなことを、見習記者たちに話して聞かせるのであった。

その際、或る論説委員が、つぎのように言った。

「とにかく、一線へ出ると、いろいろな誘惑が君たちを待ちかまえている。それで、だめになった先輩も意外に多いんだ。酒、女、キャッシュ、君たちを利用しようと思う連中や、君たちの活動をチェックしようとする奴らは、こうした誘惑を、君たちの鼻の先にぶら下げるだろう。しかし、だからと言って、何もかも断り、酒ものみません、お歳暮などとんでもありませんなどとやっていては、却って仕事にならないのだな。その辺の判断がむずかしいんだ。だが、これだけは覚えておくことだ。キャッシュと女には、絶対に手をつけるなということだ。お車代とか、酒肴料とか、いろいろな名目がつけられるだろうが、どんな名目にせよ、キャッシュは断ること。それから、女を抱かされないこと。これは絶対に大事なことだ。宴会に招ばれるのは構わない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com